

Title	肉眼で今天王星が見える
Author(s)	山本
Citation	天界 = The heavens (1921), 1(11): 220-221
Issue Date	1921-09-25
URL	http://hdl.handle.net/2433/159618
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

ことがある。變光星の中には、全く不規則で、いくら長く觀測しても週期が明かでなく、まるで出たら目に増光したり減光したりするのがある。北冠座のR星などは不規則星の好い標本だ。平常に六等星なのだが、どうかすると急に光が薄くなつて遂には一時、九等ぐらゐ迄落ちることがある。楯座のR星などもやはり此の筆法だ。こんな星は誰でも油斷なく見て貰いたいものだ。それからオリオン座A星や、カシオペア座A星や、ヘルクレス座A星等は皆色の赤い星だが、やはり又一種の不規則變光星で豫想を許さない難物だ。但し之等は高低變光範圍が小さいから、見ても見逃すことがある。

變光星を分類して見ると

一、短週期變光星

イ、アルゴオル型

ロ、琴座ベ星型

ハ、セフェウス座テ星型

二、長週期變光星

イ、ミラ星型

ロ、双子座U星型

三、不規則變光星

イ、北冠座R星型

ロ、オリオン座A星型

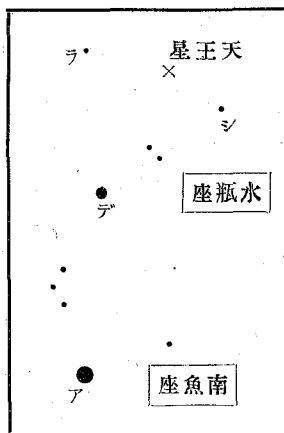
四、新星

此の中で比較的にも数も多く、標準とすべきは、アルゴオルからミラまでの四種類だ。其の他は数も少ないし、又一概に話せない星が多い。後の日に話さう。兎に角、秋の今頃は幸ひに代表的な變光星が天に見える時である。(XYZ生作)

肉眼
で今 天 王 星 が見える

此の十月の中頃、毎夜九時(月初ならば十時、月末ならば八時)正南の地平線上に「フオマルハウト」の一等星(南魚座A星)が輝く。此の星から子午線に沿ふて十四度ばかり北へ上ると、もはや、そのあたりは水瓶座で、デ星(三等)があり、更に其の北には、ラ星(四等)、それから右にはシ星(五等)がある。此のデ、ラ、シの三星は大體に於いて正三角形であつて、

其のラ星とシ星との間に微かな星が一つ見える、これが我が天王星である。微かと言つても五等半の星



であるから、ラ星とシ星との間では一番光の強い星であつて普通の肉眼にもよく見えるし双眼

鏡があれば申し分はない(但し月夜では見にくい。)

天王星は今徐々として此の水瓶座を逆行してゐる。日一日とシ星の方へ進んで行つて十一月十五日には留となり、それから又順行に移る。しかし運動が大變にゆつくりなので今年一ばいは圖の位置にあると見てもよろしい。

天王星は人類の歴史あつて以來、最初に發見された遊星である。時は一七八一年三月十三日(今から丁度百四十年前)英國の民間天文家ウィリアム・ハアシエルが手製の七吋反射望遠鏡(口径六吋)で牡牛座の二重星を觀測してゐる時、偶然ゼ星の近くに此の

未知星を發見したのであるが、形が圓いので、著しい運動をするので、誰でも始めは之れを彗星だと思つた。しかるに觀測の結果其の軌道の計算をして見ると、思ひがけもなく、遊星であつたので人は皆驚いた。驚いたのも當然である——大昔から其の時まで、天に遊星は七つ(但し此れにはバビロン人にならつて日と月とを含めておく)しか無いものだ何となれば此の七つの數こそは宇宙を司配する神聖な數なのだから、といふ風に學者も一般社會も考へてゐたのだから。發見者ハアシエルは之れによつて、一躍世界的に名を擧げた

「天王星(Uranus)」とは獨逸のボーデが名づけた名である。十九世紀の始め此の天王星が天體力學者上の大問題を惹き起して、それが遂に海王星の發見に導いたことは本誌第八九頁にも記した通りである。天王星は太陽からの平均距離一九・二天文單位(凡そ七億三千萬里)公轉週期八十四年、星の大きさは直經が地球の四倍、質量は十四倍強。衛星は十三四等のものが四つ存在してゐるが、何れも黃道面には直角に運動してゐるのは珍らしい。(山本生)